

松 山 大 学 論 集  
第 32 卷 第 3 号 抜 刷  
2 0 2 0 年 8 月 発 行

## 評伝 入江奨先生の人と学問（その2）

—— ある経済学史研究者の真摯な人生 ——

川 東 淸 弘

# 評伝 入江奨先生の人と学問（その2）

—— ある経済学史研究者の真摯な人生 ——

川 東 埴 弘

## 目 次

はじめに

第一章 生誕から松山商科大学就任まで

（1923年6月～1951年3月）

第二章 松山商科大学教員時代

第1節 松山商科大学一教員時代

（1951年3月～1973年3月）

- 1) 1951（昭和26）年度
- 2) 1952（昭和27）年度
- 3) 1953（昭和28）年度 （以上、その1、第32巻第2号）
- 4) 1954（昭和29）年度
- 5) 1955（昭和30）年度
- 6) 1956（昭和31）年度
- 7) 1957（昭和32）年度
- 8) 1958（昭和33）年度
- 9) 1959（昭和34）年度
- 10) 1960（昭和35）年度
- 11) 1961（昭和36）年度
- 12) 1962（昭和37）年度
- 13) 1963（昭和38）年度 （以上、本号）
- 14) 1964（昭和39）年度 （以下、次号）

）

22) 1972（昭和47）年度

第2節 経済学部部長・大学院経済学研究科長時代

（1973年4月～1984年3月）

第3節 再び教授に戻って（1984年4月～1989年3月）

第4節 再雇用期の入江先生（1989年4月～1994年3月）  
第三章 退職後の入江先生（1994年4月～2005年4月）  
おわりに

#### 4) 1954 (昭和29) 年度

入江先生，赴任4年目，30歳～31歳にかけての時期である。前年と同様に短大講師に貼り付けられ，7月からは助教授に昇格した。また，商経学部の講師を兼務している。

学長は伊藤秀夫が続けている（6年目）。

4月初め，入学式が挙行された。

本年度の入江先生の担当科目は，前年と同様，短大で経済学，学部では一般教養科目の経済学，専門科目の経済学史，ゼミ1，2を担当している。

本年のゼミ1に藤川諭吉，早藤収治，上甲功，川本哲，山崎全正，大田譲二，星川順一，植田卯隆，徳永伴都，高橋一之，西田武らが入った。ゼミ1ではスミスの国富論とリカードウの「Political Economy and Taxation」，ゼミ2（橋本廸治，林茂憲，菅晴美らの学年）ではケインズの「General Theory」をテキストで使っている<sup>1)</sup>。3年の星川順一（1952年4月入学，1954年4月入江ゼミ，1956年3月卒業）は，ゼミ1でスミス・リカードウを学び，ゼミ2にも参加し，ケインズ理論を学んでいる。星川順一の後の回想を紹介しよう。

「3回生に専門ゼミの選択をしなければならない。そのとき入江奨先生のもとで経済学史に接した。リカードウの『経済学と課税の原理』（1817年）を教材にして頂いた。先生は解説本より原典に当たれという方針であった。そこで比較生産費説に気づいた。二国二財のモデルであった。労働で計って二財の生産性がいずれもA国が優位であるとき，A国はなにも

---

1) 山崎全正「入江先生の鮮明な思い出を」『つくし』第29号，2006年1月，9頁。大田譲二「入江先生の御逝去を悼んで」『つくし』第29号，2006年1月，10頁。

B国とは関係なく生産すれば良いではないかと一見思われる。ところがリカードは二財間の生産性比がA国とB国と異なるときには、それぞれの優位な産業に特化すれば、双方の効用が増加すると述べていた。現実は一とびとにとってリカード命題を読まずに、彼の命題を実現していた。経済学は面白い分野だと感じるようになった。…またゼミでは、ケインズの『雇傭、利子および貨幣の一般理論』を用いていた。そこでは住宅など有意義な事例が賢明であろうと断わっていたが、廃炭坑のなかへ紙幣を埋めつくし、後民間企業に採掘させることも、社会全体として富を増加させることもありうる。その事例は有効需要の論点を明確化するための説論であった。学生にとっては意外と感じられる命題を、原典に当たって教えようとされているように感じられたその方法は、論理を執拗に教えていたと思われる」<sup>2)</sup>

また、入江先生は引き続き経済学研究会を指導している。安井修二（1952年4月入学、1954年4月太田ゼミ、1956年3月卒業）の回想によると、ゼミは太田ゼミであるが、「入江先生がご指導下さっていた経済学研究会での生活を中心として過ごしました」<sup>3)</sup>と述べている。そして、このとき、入江先生は、経済学研究会でヒックスの『価値と資本』を学生らと輪読していた。さらに安井修二の回想を紹介しよう。

「筆者は約40年前、松山商科大学（現、松山大学）の学部生の時期に経済研究部〔川東注、正確には経済学研究会〕に所属し、入江教授の指導でヒックス『価値と資本』を輪読する機会に恵まれた。ゼミナール（太田明二教授）で学んだケインズ『一般理論』とともに、とにかくこの2つの古

2) 星川順一「入江奨先生の思い出」『温山会報』第62号、2020年2月、83～84頁。「大学での思い出」『つくし』第29号、2006年1月、42頁。

3) 『松山商大新聞』第111号、1962年6月11日。

典に学部生としてふれえたことは幸いであった。経済学史の講義を含めて、入江先生に感謝の念を覚えている（1994. 1. 20）<sup>4)</sup>

さらに、入江先生は資本論研究会を開催していた。この資本論研究会の思い出を星川順一が後に回想しているので紹介しよう。

「当時入江先生を中心に資本論研究会が催されていた。…私の学生時代の思い出は主としこの資本論研究会を軸にして形成されているようである。現在愛媛新聞社の沢田俊典氏、南海放送の山崎全正氏、渡部、平木、横山の諸氏や橋本博氏などそれぞれ個性的な面々がそこに集まっていたようである。

これらの人々が大学の授業にたいして真面目な学生であったかどうか私は知らない。おそらく私をふくめてそうでない確率のほうが高かったのではないかとも思われる。それはそういう時代であったのかもしれないが、大学の成績にこだわる風潮はこの研究会に関するかぎりは存在しなかったように思われる。だが研究会のほうは大変な熱気をはらんでいたことは事実である。毎週一回夕刻より入江先生のお宅で研究会が始まる。夜を徹し、朝日が上がるころようやく帰途につくことも数多くあった。議論の途中で疲れるとだれかがねむり、他のだれかは議論を続けていた。ひと時のねむりをとるとその人は再び議論のなかに入っていたようである。その日のうちに帰るときは、よくかれらと一緒に屋台に立ち寄る習慣がついていた。安酒をくみながらの議論も学生時代の得がたい思い出である」<sup>5)</sup>

---

4) 安井修二「ジョン・ヒックスはなぜ IS-LM 分析に満足出来なかったか」の後記（『松山大学論集』第5巻第5号、1993年12月、47頁）。

5) 星川順一「研究会の思い出」『つくし』第2号、1969年3月10日、8頁。また、「入江教授御退職記念感謝の夕べ」でも星川順一（大阪市大教授）が学生時代の資本論研究会について述べている（『つくし』第19号、1994年7月31日）。

星川の回想中、山崎大全は星川の同級であり、また沢田俊典は1学年下、橋本博は2学年下の入江ゼミ生であった。なお、星川順一は、入江先生宅（清水町校宅）に入り浸りであった、という。

また、入江先生の短大での指導生、北哲郎（1954年4月短大入学、1956年3月卒業）も入江先生の短大の経済学を学び、入江先生の家によく訪問し、議論した、という。北は「奥様が女子美大に留学中で単身であった若き先生の校宅（清水町時代）にお伺いしてはマルクス、レーニンを論じ口角泡を飛ばし産別、GHQ、ストライキ論と自由奔放に話の花が咲いたものだった<sup>6)</sup>と回顧している。

同年7月、入江先生は短期大学部助教授に昇格した。

11月、入江先生は経済学史学会第10回大会にて、「古典派価値論－特にリカードウを中心として－」を発表している。その報告は「スミスの価値論について提起した新解釈の観点に立てば古典派価値論はどのように理解せざるを得なくなるか。この問題をもって、リカードウ価値論について、とくに、それが投下労働価値説と見做され得るかどうかにもメスを加えた報告。相対的投下労働説のもつ非労働価値論的性格および貨幣中立化論のもつ非労働価値論的性格を指摘し、総じて古典派価値論とマルクス価値論（労働価値論）とが基本的に非連続であり、異なるものであるという見解を提起した」ものであった<sup>7)</sup>

12月17日、『松山商大新聞』第60号は1954年を振り返り、学生、教授、社会人への最近の重要な諸問題についてアンケートを実施した（①最近の政治について、②中共貿易をどう思うか、③最近の労働攻勢について、④最近の復古調をどうみるか、⑤就職難と学生生活について、⑥学生の恋愛をどう思うか）。入江先生もアンケートに答えた。入江先生の回答の大要は次の如くであった<sup>8)</sup>

---

6) 北哲朗（短2回）「入江奨先生の松山大名誉教授就任をお祝いして」『つくし』第20号、1995年7月、14頁。

7) 入江奨「松山商科大学大学院設置認可申請書」の研究概要。1971年11月10日。

8) 『松山商大新聞』第60号、1954年12月17日。

- ①最近の政治で眼につくことは、政界の再編成である。保守と革新の激突である。それらは世界の政治情勢と日本のデフレを背景としている。
- ②中共貿易の是非を論議する段階は過ぎた。進んでいかにスムーズに進めるかだ。
- ③不況期の労働運動は非常に困難な立場に立たされる。最近の労働運動は労働防禦とみなされる。
- ④家族制度とか、道徳教育とか憲法改正とかを「復古」的とはみていない。何がそのような動きを必要としているのか、という観点から注視している。
- ⑤会社の気に入る人間になるような勉強をすすめはしない、社会の発展の原動力になるような勉強をすすめたい。そのことが本当に会社のためになる。
- ⑥恋愛は自然現象である。各人の気高さが加わって美しい生活が実現される。悩めば共に打明けよ、師の門をたたけ。恋愛を知らぬことを恥じる勿れ、学生の本分は勉強だから。

1954年12月19日、本学の経済学研究会（能田孝也会長、太田ゼミ）は、西日本の各大学の総合による西日本学生経済学研究会を結成すべく、西日本の各大学に次のような手紙を出した。

「私達が、一個人として経済学の研究をなさんとする時、多くの困難を覚えますが、その困難を克服して研究の成果をあげる為に、各大学では同志が相集まって研究会を作り、共同で研究を致します。しかし私達は、狭き知識と未熟さの故に個々の大学では克服し難き諸々の困難に直面します。多くの大学の研究会が相互に研究成果を交換、討議し合う事によって、かゝる困難を克服し、研究成果を一段と高め、又各大学での研究意欲を増進させる事と信じます。現に私達は西日本学生経営研究会で大いなる成果

をあげている事を思い、経済学研究の分野においても、同様の機会を持つ事を切に望んで来ましたが、いまだにその機会を持ち得ない事は誠に残念であります。こゝに於て私達はかゝる目的達成のために、西日本学生経済学研究会（仮称）を結成し、各大学研究会の研究成果を交換、討議し合うことによって、相互の学問交流と理解の中に、学問研究で学生生活を有意義にならしめたいと思います」<sup>9)</sup>

本学の経済学研究会は以後5回にわたり、西日本の各大学と連絡をとった。経済学研究会が発案して、呼びかけるなど、経済学研究会の意識の高さ、リーダーシップぶりが窺われる。経済学研究会会長の能田孝也は太田明二ゼミの出身で、1956年3月卒業する。そして、この時、経済学研究会の顧問をしていたのは、入江先生であり、その指導があったと推測される。

1955（昭和30）年3月中旬、1955年度の入試が、本校、京都、福岡の地にて行なわれた。募集定員は経済、経営学科ともに各125名であった。

3月下旬、松山商大第4回卒業式が挙行され、290名が卒業した<sup>10)</sup>入江ゼミでは橋本勉治、林茂憲、松沢宏、森本哲夫、菅晴美、二宮正ら10名が卒業した。

3月、入江先生は『松山商大論集』第6巻第1号に「スミスの真実価格論について(五)－スミス価値論の研究の一節－」を執筆した。これで、入江先生のスミスの真実価格論の連載は完結する。

## 5) 1955（昭和30）年度

入江先生、赴任5年目、31歳～32歳にかけての時期である。入江先生は本年4月、松山商大商経学部助教授に任ぜられ、同年4月短大兼務を命ぜられた。

9) 『松山商大新聞』第62号、1955年6月2日。

10) 文部省への『松山商科大学（経済学部、経営学部）設置認可申請書類』（1961年9月7日）より。『六十年史（資料編）』も290名。なお、『温山会名簿』では293名で、1954年10月の前期卒業生を含んだ人数。



この時、31歳であった。

学長は伊藤秀夫（7年目）が続けている。

4月初め、入学式がなされた（『松山商大新聞』第61号が欠で入学者数不明）。

本年度から卒業論文と専門演習が必修となった。

入江先生の本年の授業科目は、学部的一般教養科目の経済学、専門科目の経済学史、ゼミ1、2、そして兼務の短大の経済学であった。

今年のゼミ1に小笠原伸次、高木英和、野島上嗣、百合本健夫、矢野元昭、三好浩文、沢本俊典らが入った。

ゼミ1の授業は未確認だが、ゼミ2（山崎全正、大田譲二、星川順一らの学年）ではハイエクを教授している<sup>1)</sup>

また、入江先生は引き続き経済学研究会、資本論研究会も指導している。なお、この年から、入江先生の調査によると、経済学研究会が経済学研究部に昇格している<sup>2)</sup>。それは、『松山商大新聞』第63号（1955年6月15日）に、学友会の6月14日の昇格会議で、経済学研究会と経営学研究会が部に昇格、また、資本論研究会が公認団体の同好会に昇格との記事があり、入江先生の調査の正しさが確認される<sup>3)</sup>

さらに、入江先生は新聞学会の顧問を続けていた<sup>4)</sup>

さらにまた、この年、教職員会の委員を務めた。

7月1日から3日間、本学経済学研究会の半年以上にわたる努力が実を結び、第1回西日本学生経済学研究会が本学で開催された。参加校は九州大学、福岡商大、西南学院、山口大学、関西大学、立命館大学、和歌山大学、神戸商大、

---

1) 山崎全正「入江先生の鮮明な思い出を」『つくし』第29号、2006年1月、9頁。大田譲二「入江先生の御逝去を悼んで」『つくし』第29号、2006年1月、10頁。

2) 入江奨「学生の自主的研究活動の動向の一齣」『六十年史（写真編）』248頁。

3) 『松山商大新聞』第63号、1955年6月15日。

4) 入江先生がいつから新聞学会の顧問となったかは不明である。『六十年史（写真編）』99頁に新聞学会（1955年）の写真があり、「顧問入江先生」と記されている。だからそれ以前から顧問となり、その後1963年度まで続けられた（学生部の資料より）。

大阪商業大学、同志社大学、近畿大学、松山商科大学等14校で、百数十名が参加した。7月1日は代表者会議で、本学経済学研究会が起草した規約原案が承認された。2日午前9時より結成大会が開かれ、経過報告、規約朗読がなされ、そして講演に移り、本学の太田明二教授が「経済自立と経済学の動向」と題した講演を行なった。そして、2、3日に共同研究（討論会）と各大学特殊研究発表がなされた。共同研究は「日本経済自立に関する諸問題」で、貿易、金融財政、産業構造、農業問題の4つの分科会に分かれて討論が行なわれた。各大学の特殊研究の発表では、和歌山大「ヒックス景気循環論についての一考察」、大阪商大「マルクス価値論とその歴史的使命」、神戸商大「日本に於ける戦後の貿易構造」、西南学院「ケインズ経済学の一考察」、福岡商大「資本効果について－カ尔多ア景気循環論についての一考察－」、関西大学「アジアの将来と人口問題」、山口大学「景気変動論の貨幣論的研究」、同「経済成長理論の一考察－ハロッド体系をつく－」、松山商大「ソーシャル・アカウンティングについての一考察」が報告され、2日間にわたって行なわれた<sup>5)</sup>。松山商大の経済学研究会（経済学研究部）は主催校のためか、報告していないようである。

7月6日の『松山商大新聞』第64号に、サークルの状況が報告されている。資本論研究会については次のように報告されている。

「会の誕生は丁度二年前の夏、入江助教授を中心にくだる暑さの中、十数名でスタートした。当初は資本論第三部を取扱っていたが、先般公認団体に昇格して部員も増えたので、最近では資本論と経済学テキストの2本立で研究活動を行っている。どちらかといえば巾の狭い現段階から一日も早く脱却して全学生に親しまれる研究会への成長が望まれる」<sup>6)</sup>

5) 『松山商大新聞』第62号、1955年6月2日、同第64号、7月6日。なお、『松山商大新聞』では、まだ、経済学研究会の名称が使用されていた。

6) 『松山商大新聞』第64号、1955年7月6日。

また、9月15日の『松山商大新聞』第65号は、原水爆禁止世界大会、特に広島、長崎大会の平和祈念式典を報道している。なお、広島大会については神森智先生が報告している<sup>7)</sup>。平和への思いは新聞学会の顧問をしている入江先生の指導もあったと推測される。

12月2日から5日まで、第2回日本学生ゼミナール大会（インゼミ）が神戸大学にて開催された。松山商科大学からは経済学研究部で入江ゼミ3年の高木英和が経済政策部門「経済政策における理論の実践」において、ウエーバーの実証主義を高く評価すると共にその限界について報告している<sup>8)</sup>。

1956（昭和31）年3月12日、13日、1956年度の入試が、本校、京都、福岡の地にて行なわれた。募集定員は経済、経営ともに各125名であった<sup>9)</sup>。

3月下旬、松山商大第5回卒業式が挙行され、290名が卒業した<sup>10)</sup>。このときの卒業生の中に安井修二（太田ゼミ、経済学研究部）、相原陽（太田ゼミ）らがいる。安井修二は神戸大学大学院に、相原陽は九州大学大学院に進学する。入江ゼミでは星川順一（経済学研究部）、山崎全正（後、入江ゼミ同窓会「つくし会」副会長）、藤川諭吉、早藤収治、上甲功、川本哲、大田譲二、植田仰隆、徳永伴都、高橋一之、西田武ら13名が卒業した。このうち、星川順一は大阪市立大学大学院に進学する。

卒業式の前に、大学院進学が決まった、星川、安井、相原の3名を祝して、入江、太田、稲生の3先生が宴を開いている<sup>11)</sup>。

## 6) 1956（昭和31）年度

入江先生、赴任6年目、32歳～33歳にかけての時期である。商経学部助教

---

7) 『松山商大新聞』第65号、1955年9月15日。

8) 『松山商大新聞』第68号、1956年1月22日。

9) 『松山商大新聞』号外、学園案内号、1956年4月13日。

10) 『松山商科大学（経済学部、経営学部）設置認可申請書類』（1961年9月7日）より。『六十年史（資料編）』では292名。なお、『温山会名簿』では289名（1955年10月卒業を含む）。

11) 安井修二「入江先生への思い出」『温山会報』第62号、2020年2月、84頁。

授で、短大も兼務している。

学長は伊藤秀夫（8年目）が続けている。

4月初め、入学式が挙行され、経済学科220名、経営学科75名が入学した<sup>1)</sup>。

4月1日、伊藤秀夫学長は経済学科の工業政策の教員として望月清人を講師として採用した。また、神戸大学大学院修士課程に進学した安井修二を助手補に採用した。

本年度の入江先生の授業科目は前年と同様で、商経学部の一般教養科目の経済学、専門科目の経済学史、ゼミ1、2、そして短大の経済学であった。

今年のゼミ1には大西亮吉、佐藤亘、橋本博、三津山寛功、宮島健三、山口明宏らが入った。ゼミでは、三津山寛功の後の回想によると「最初リカードウ、後からケインズを読みました」とある<sup>2)</sup>。

また、入江先生は引き続き経済学研究部、資本論研究会を指導していた。さらに新聞学会顧問を務め、教職員会委員を続けた。

ゼミ1の大西亮吉は資本論研究会にも参加していた。大西は後の回想で「先生の自宅で先生を囲み、同僚四、五人でマルクスの資本論を原典で読破しようと、何度か徹夜で議論し、向学に燃えた若き日々がやたらと懐かしく、生涯忘れ得ぬ貴重な体験をしました」と回顧している<sup>3)</sup>。また三津山寛功は、「資本論の講読会を、入江先生、稲生先生、望月先生、さらには神森先生などと共にやった思い出もあります」と述べている<sup>4)</sup>。

6月、入江先生は経済学史学会関西部会において「リカードウの再生産論」について報告している。それは「リカードウの相対的投下労働説の特徴をミスやマルサスの支配労働価値尺度説と比べてどのようにとらえたらよいかという視点でおこなわれた報告。とくに価値修正論に焦点を合わせて、リカードウ

1) 『松山商大新聞』号外、学園案内号、1956年4月13日。

2) 三津山寛功「私の世界」『つくし』第2号、1969年3月10日、13頁。

3) 大西亮吉「会員通信」『つくし』第18号、1993年3月31日、7頁。

4) 三津山寛功「私の世界」『つくし』第2号、1969年3月10日、13頁。

の理論が価値変動と利潤変動との無関連性を明らかにする方向で組み立てたものであること、価値修正論がその積極的論証の論理であること、その論理展開が『価値実現』問題に関する盲目性を伴い、その結果としてセイ法則的認識を伴うことになったという見解を提示した<sup>5)</sup>ものであった。

7月、第2回西日本学生経済研究会が京都で同志社・立命の共同主催で行われている。松山商大からは「経済自立と経済学の動向」, 「社会会計についての一考察」が発表されている。この大会に太田明二, 入江奨先生も出席している<sup>6)</sup>。

1956年9月、入江先生は、堀経夫還暦記念論文集『古典派経済学の研究』(山本書店)に論文「A・スミスの再生産論に対する一考察—いわゆるV+Mのドグマを中心として—」を執筆した。この論文の概要について、入江先生は後に「スミスの再生産論におけるV+Mのドグマの、スミスにとっての論理的必然性は何に起因するかを究明し、スミスの本原的貨幣購買論こそがその源であるという見解。スミスの再生産論の本質が単線的迂回的再生産論であるという見解を提示している」<sup>7)</sup>と述べている。なお、この論文集には、豊崎稔、小林昇、白杉庄一郎、楠井隆三、大河内一男、高木暢哉、玉野井芳郎、平林忠雄、越村信三郎、中野正、豊倉三子雄、末永茂喜、三谷友吉、久保芳和、大道安次郎ら錚々たる経済学史研究者が執筆している。

12月、入江先生は『松山商大論集』第7巻第4号に「A・スミスの地代論—A・スミスの価値論研究の一節」を執筆した。この論文の概要について、入江先生は後に「スミス地代論の論理をその『価値論』の論理の反映としてとらえる通説、スミスの地代論が矛盾を内包しているという通説を批判し、矛盾とみられるスミス地代論のスミス自身にとっての統一的論理をさぐりだし、スミスにとって地代論と価値論とがどのように関連するものであったかを検討しよ

5) 入江奨「松山商科大学大学院設置認可申請書」の研究概要。1971年11月10日。

6) 『六十年史(写真編)』100頁に入江、太田先生が写っている。

7) 入江奨「松山商科大学大学院設置認可申請書」の研究概要。1971年11月10日。

うとしている。自然価格の大きさを規定する有効需要それ自体の変動＝社会的富の変動という考え方が主柱になっているという見解，自然価格の構成要素が『完全に同一性質のもの』でなければならぬという理論的要請は一般的にいて全くないという見解を提起している点に本論の特徴があろう<sup>8)</sup>と述べている。

1957年2月13日，伊藤秀夫学長は病気のため学長職を辞職した。そこで，星野通教授（理事）が学長職務代理に任命された。

そして，星野通学長代理の下で，学長選挙制度作りが行なわれ，3月7日，「松山商科大学学長選考規程」が制定された。推薦委員会方式であり，候補者3名以内を推薦する制度であった<sup>9)</sup>。

星野学長代理下の，1957年度の入試が，3月11，12日の2日間にわたって，松山，京都，福岡の3会場にて行なわれた。募集人員は250名（経済学科，経営学科各125名），志願者は806名であった<sup>10)</sup>。

3月下旬，松山商大第6回卒業式が挙行政され，320名が卒業した<sup>11)</sup>。入江ゼミでは，小笠原伸次，高木英和（経済研究部），野島上嗣，百合本健夫，矢野元昭，三好浩文，沢本俊典ら22名が卒業した。

3月，学長選考規程に基づき，推薦委員会（教育職員7名，事務職員2名，温山会2名）を開き，学長候補者に星野通教授1人だけが推薦され，3月30日の学長選挙で，星野教授（56歳）が選出された。入江先生も星野通教授支持であった。

星野教授の経歴は次の通りである。

1900年10月1日伊予郡那中町に生まれ，松山中学，松山高等学校を卒業し，1922年4月東京帝国大学法学部法律学科独法科に入学し，1925年3月卒業し，

8) 入江奨「松山商科大学大学院設置認可申請書」の研究概要。1971年11月10日。

9) 『五十年史』290～292頁。

10) 『松山商大新聞』第73号，1957年2月7日。

11) 『松山商科大学（経済学部，経営学部）設置認可申請書』（1961年9月7日）より。『松山商科大学六十年史（資料編）』では318名，『温山会名簿』では321名。

同年4月松山高等商業学校教授に就任した。星野教授は1943年に『明治民法編纂史研究』（ダイヤモンド社）、1944年に『民法典論争史』（日本評論社）を発売し、1948年には本学最初の博士号（法学博士）を取得した法律学者であり、また、1952年からは、慶応大学法学部教授の中村菊男・手塚豊との間で明治民法典論争を繰り広げ、学界からも注目された著名な学者であった。また、法人面では1946年12月から理事を務め、さらに松山経専を松山商大に昇格させた委員長でもあった<sup>12)</sup>

### 7) 1957（昭和32）年度

入江先生、赴任7年目、33歳～34歳にかけての時期である。商経学部助教授で、短大も兼務している。

4月1日、星野通教授が第2代松山商大学長兼理事長に就任した（任期は1960年12月31日まで）。また、短大学長を兼ねた。

星野通学長は「第二代学長に就任して」の辞において、大学の目的は研究の強化、教育の充実、そして人物の育成であることを強調し、その使命を果たしていきたいと抱負を述べ、また、学生の徳育の目標としての伝統の三実主義の再認識を提唱し（なおここで、三実主義の順序を真実→忠実→実用に改め）、最後に学園のルールの尊重、人に接するに当り、礼節を守るよう呼びかけた<sup>1)</sup>

4月1日、星野通は学長兼理事長に就任するや、新教員の採用や学内諸規程の制定による大学の民主的運営、新図書館等の建設、学内の施設拡充、また校訓「三実主義」の再興等に精力的に取り組んだ。

4月1日、星野学長は教員人事で、前年研究員で採用された星野陽を一般教育科目の文化史担当の講師に採用した。また、岩国守男を経営学科の労務管理担当の助手に採用している。

---

12) 拙著『評伝 法学博士星野通先生－ある進歩的な民法・民法典研究者の学者人生－』日本評論社、2019年、参照。

1) 『松山商大新聞』第74号、1957年5月27日。

4月初め、入学式が行なわれ、330名が入学した<sup>2)</sup>

本年度の入江先生の授業科目は、前年と同様、一般教養科目の経済学、専門科目の経済学史、ゼミ1, 2, そして短大の経済学であった。

本年のゼミ1には、浅利達之、井原敏夫、一宮卓、水島章夫、藤間三郎らが入った。ゼミ1の教科書は藤間三郎によると、『日本経済読本』であったという<sup>3)</sup>

また、入江先生は引き続き経済学研究部、資本論研究会を指導していた。また、新聞学会の顧問をしていた。

5月1日、星野通新学長はそれまでの校務体制を一新した。事務局長を事務職員とし、木村真一郎を抜擢した。また、教務課を教務部に、学生課を学生部に変更し、新教務部長に菊池金二郎、新学生部長に八木亀太郎が就任し、星野学長を支えた<sup>4)</sup>

7月1日から3日間、第3回西日本学生経済研究会が関西学院にて開催された。松山商大も参加した。1日は講演会、2日は自由テーマによる発表会、3日は共通テーマによる発表会で、統計学・計量経済学、経済哲学、理論経済、金融、財政学、変動論、経済史、経済学史、経済政策、国際経済、ジュニア(貿易の日本経済に於ける意義)など多彩に開催された。本学の経済学研究部、ゼミ等も発表したと思われるが、詳細は不明である<sup>5)</sup>

9月、入江先生は『松山商大論集』第8巻第3号に、研究ノート「労働価値論史のための覚書－ミークの業績をめぐって－」を発表した。

ロナルド・L・ミーク (Ronald L Meek) は1917年ニュージーランド生まれ、1946年にケンブリッジに行き、1948年グラスゴウ大学の政治経済学科の講師となり、1949年にケンブリッジで学位を得、ドップ、スウィージーとともに英

---

2) 『六十年史(資料編)』173頁。

3) 藤間三郎「卒論の事、長男誕生、酔水…鮮やかに甦る思い出」『つくし』第29号、2006年1月、13頁。

4) 『六十年史(史料編)』125～131頁。

5) 『松山商大新聞』第74号、1957年5月27日。同第82、83合併号、1958年5月25日。



米におけるマルクス経済学を代表する存在であった。入江先生の研究ノートはミークの著書「Studies in the Rabour Theory of Value」1956年（水田洋・宮本義雄訳『労働価値論史研究』日本評論社、1957年）を書評したものである。入江先生はミークのマル系と非マル系との架け橋となろうとしていることについて一面では評価しながらも、ミークのマルクスの労働価値説は独占段階では作用しないが、新しい仕方で作作用するという説には極めて批判的であった。この書評の概要について、入江先生は後に「ミークの研究の特徴が労働価値理論を商品交換に関する法則として理解している点にあるという判断に立ち、『価値関係』論に対する関心を深め、労働価値理論史＝再生産理論史の観点をたぬくことが労働価値理論史のふさわしい研究の要件でないかという見解を提示している」<sup>6)</sup>と述べている。

11月30日、入江先生は『松山商大新聞』第77号に「わたくしと読書について－想出すままに－」を寄稿している。予科、学部時代の読書についてはすでに紹介した。そこでは紹介しなかった、戦後の学部時代以降の文学のことについて次のように記されている。

「文学に親しむ場合にも徐々に変化が訪れた。宮本百合子や小林多喜二がやっと僕の世界に入りこむ様になった。志賀や独歩や藤村や漱石も相変わらず僕の心を惹く。しかし僕の眼は、次第に、意地悪く？なっている。馬鹿一も好きだけれど、それだけでは放っておけない、僕にとっての文学の世界にも次第に苦痛の種が生まれ出した。これで、やっと、夫々の本当の姿に接することの出来る気運ができたという様に見てよいのだろうか。僕の映像の中の英雄の姿が徐々に崩れつつあるのは、まさか年のせいではあるまい（中略）。

その様な僕に今磐石の重みで迫って来ているものが五味川の『人間の条

---

6) 入江奨「松山商科大学大学院設置認可申請書」の研究概要。1971年11月10日。

件』であり、ドウヂェーンツエフの『パンのみによるにあらず』である。夫々問題の対象は異なるが、僕に生きることのきびしさを提示し、刻一刻の歩みの中での主体性の問題を投げかけてくれ、その様な形で勇気を出すように激励してくれる点では同じである。『迷路』も機会を見つけて熟読して見たいと思っている。また『文珠九助』の様な作品が続々と生み出され鍛えられて行くことも大いに期待している。それと同時に、どんなに立派な作品が出来ても、あっても、その真髓を吸収できるかどうかは、それに接する読者の姿勢＝問題意識に依存するのではないかと思われてならない。主体的姿勢をとることの困難な環境が次第に拡大し進化しつつある現状の下で、特にこの点を痛感する（入江奨、本学助教）<sup>7)</sup>

この一文を読むと、入江先生は相変わらず重厚な文学青年でもあったことがわかる。

12月、入江先生は『松山商大論集』第8巻第4号に「ケインズのいわゆる貨幣経済の根本的性格－ケインズの再生産体系の研究の一齣－」を発表した。この論文は、未完であるが、その概要は、後の入江先生によれば次の如くであった。

「経済学史を労働価値理論史＝再生産理論史として把握する観点を現代経済学の歴史的階級的 성격の研究という表題に注入して取り上げられたテーマ。ケインズのいわゆる貨幣経済あるいは貨幣的世界の基本的特徴が貨幣そのものの社会的存在によって規定されておらず時間的要素の果す役割の存在によって規定されている点に注目している。『非自発的』失業理論の基本的特徴は、貨幣的要因の経済機構に対する積極的作用を理論構造の不可欠の一貫として内包する点のみに認められる、という見解を提示して

---

7) 『松山商大新聞』第77号、1957年11月20日。

いる」<sup>8)</sup>

1958（昭和33）年3月11、12日、1958年度の入試が行なわれ、募集人員は250名（経済、経営学科各125名）で、志願者は719名で、3月17日に301名（経済学科205名、経営学科96名）の合格発表がなされた<sup>9)</sup>

3月25日、本学講堂にて、松山商大第7回卒業式が挙行され、308名が卒業した<sup>10)</sup>。入江ゼミでは、大西亮吉、佐藤亘、橋本博、三津山寛功、宮島健三、山口明宏ら17名が卒業した。

### 8) 1958（昭和33）年度

入江先生、赴任8年目、34歳～35歳にかけての時期である。商経学部助教授で、短大も兼務している。

学長は星野通が続けている（2年目）。

4月11日、午前10時より本学講堂にて新入生330名を迎えて入学式が行なわれた。星野学長は学問第一主義を貫き、充実した大学生活を送るよう激励した<sup>1)</sup>。この時の入学生の1人に岩田裕（1958年4月入学、1960年4月太田ゼミ、1962年3月卒業）がいる。

本年度の入江先生の授業科目は前年と同様で、一般教養科目の経済学、専門科目の経済学史、ゼミ1、2、そして短大の経済学であった。

本年のゼミ1に、青野覚、大谷泰之、岡利樹、篠崎正男、遠木武、中村弘、萬井将臣、三島茂、森原武彦、得居郁生らが入った。

また、本年度から入江先生は経済学研究部の部長をおり、太田明二先生に交代したが（太田明二は1958年4月から1966年3月まで部長）、引き続き関与

8) 入江奨「松山商科大学大学院設置認可申請書」の研究概要。1971年11月10日。

9) 『松山商大新聞』第79号、1958年2月15日、同第80号、3月25日。

10) 『松山商科大学（経済学部、経営学部）設置認可申請書類』（1961年9月7日）より。『六十年史（資料編）』も308名。『温山会名簿』も308名。

1) 『松山商大新聞』第81号、1958年4月20日。『温山会報』第2号、1958年9月。

したようだ。

また、入江先生は資本論研究会を引き続き指導し、入江先生の自宅（校宅）で毎週1回行なわれたようだ。さらに、新聞学会顧問を続けている。

本年は創立35周年の年にあたる。また、来年は大学開設10周年を迎える。そこで、星野学長・理事長は新図書館と新食堂の建設を決めている<sup>2)</sup>

5月25日の『松山商大新聞』第82、83合併号に、「本学三十五年の歩みを回顧する」と題し、星野通学長や古川洋三教授、川崎三郎教授、大鳥居蕃教授、増岡喜義教授らが出席し、入江先生が司会した座談会が催されている<sup>3)</sup>

入江先生は、『松山商大新聞』第82、83合併号（昭和33年5月25日）に、「新講座派」と言われる豊田四郎著の『日本資本主義論争批判』を紹介している。そこで、戦後の日本資本主義は、形式的には政治機構の民主化、農地改革、敗戦によるアメリカとの緊密な結びつき、等によって著しく変化し、日本資本主義論争の対象に外面的な変化が生じた。さらに戦後の生産力の発展はマルクス経済学の基本命題に関する反省をマルクス学徒に強制するに至った。このような諸条件の中で、日本資本主義に関する認識はどのような影響を受け、どのように発展せしめられなければならないのか。このような問題に関する業績として豊田氏の著書を受けとめ研究していく必要がある。特に講座派理論が、様々な逆境と試練の中でどのように鍛えられてきたかという点が注目に値する、などと述べている<sup>4)</sup>

1958年7月5日から3日間、第4回西日本学生経済学研究会が香川大学で行なわれた<sup>5)</sup>。1日目は講演会と討論会、2日目は自由テーマによる発表会、3日目は部門別共通テーマによる発表会で、理論経済学、計量経済学、計画経済、変動論及び恐慌論、経済政策、国際経済学、経済史、金融論、財政学、保険論、交通論、ジュニアの各部門に分かれて発表会が行なわれた。本学からも経済学

2) 『松山商大新聞』第81号、1958年4月20日。

3) 『松山商大新聞』第82、83合併号、1958年5月25日。

4) 同上。

5) 同上。

研究部が発表した<sup>6)</sup>が、詳細は不明である。

1959（昭和34）年1月、入江先生は愛媛地評の「調査月報」に「恐慌問題の原則的説明」の一文を寄せている（未見）。

3月上旬、1959年度の入試が行なわれ、募集人員は250名（経済、経営学科各125名）であった。

3月20日、松山商大第8回卒業式が挙行され、280名が卒業した<sup>6)</sup>。入江ゼミでは、浅利達之、井原敏夫、一宮卓、水島章夫、藤間三郎ら16名が卒業した。

### 9) 1959（昭和34）年度

入江先生、赴任9年目、35歳～36歳にかけての時期である。商経学部助教授で、短大も兼務している。

学長は星野通が続けている（3年目）。

4月上旬、入学式が挙行され、354名が入学した<sup>1)</sup>。

本年度の入江先生の授業科目は前年と同様で、一般教養科目の経済学、専門科目の経済学史、ゼミ1、2、そして短大の経済学であった。

本年のゼミ1に、伊田修、小原正明、新野清（経済研究部）、中村勝良、藤川哲夫、藤木和義、宮下英範、森俊雄、千葉凱三らが入った。ゼミ生の中村勝良は後にゼミの思い出として「入江先生を囲み、サミュエルソンの経済学を討論し、ある時はゼミI部II部合同で皿ヶ峰へ登山し、或時は先生を引っぱり出しソフトボールをし、先生には審判になってもらった」などと回顧している<sup>2)</sup>。

また、入江先生は引き続き、経済学研究部（部長は太田明二）に関与し、また資本論研究会も指導していた。さらに新聞学会の顧問も続いていた。

6) 『松山商科大学（経済学部、経営学部）設置認可申請書類』（1961年9月7日）より。『六十年史（資料編）』も280名。温山会名簿では281名（1988年10月卒業を含む）。

1) 『六十年史（資料編）』173頁。

2) 中村勝良「たより」『つくし』第2号、1969年3月10日、17頁。

この時、1年生のとき入江先生の経済学の授業を受け、2年生になっていた岩田裕が入江先生宅を訪れて「経済学の何を学んだら良いですか」と聞いたところ、ヒックスの『価値と資本』を勧められ、難解なヒックスに取り組んだという（岩田裕先生より聞き取り）。

4月、入江先生は『松山商大論集』第10巻第1号に「国富論における価値法則論－スミスの労働体系論の覚書－」を発表した。その概要は、後の入江先生によれば次の如くであった。

「マルクスの価値法則論の理解を正確にするためには労働価値理論史の正確で科学的な把握が必要であり、そのためには先ず『国富論』の価値法則論に関する正確で内在的な科学的把握が必要であろう。この観点からおこなわれてきた『真実価格』論に立って、スミスの全理論体系の基本的基礎が価値法則論におかれているという見解、その価値法則論の構造が労働体系論の構造としてとらえられるべきものだという見解、価値の質的規定が二段階的に行われ（第一編、第五、第六章）、価値の量的規定が二段階的におこなわれている（第七、八－十一章）という見解が示され、価値形態論欠如の労働体系論の弱点と理論の歴史的推移とのかかわりあい意識されている」<sup>3)</sup>

7月、入江先生は『松山商大論集』第10巻第2号に「価値形態論の経済学における役割－経済学における論証について－」を発表した。その大要は次の如くである。

「(一) 近代経済学者として著明なジョン・ロビンソンは1941年にマルクス理論に胸襟を開く発言をした。ロビンソンはマルクスの労働価値説、

---

3) 入江奨「松山商科大学大学院設置認可申請書」の研究概要。1971年11月10日。

価値法則論を形而上学的なものとして退けたが、マルクスの拡張再生産表式論は近代経済学にも生かせると考えた。他方、マルクス経済学者として著明なロナルド・ミークは1956年にマルクス理論の基本線（唯物史観）は依然として妥当するが、新しい資本主義の段階（独占段階）では現実価格が供給価格から乖離しており、原型の労働価値論に固執せず、修正が必要とした。ミークはマルクスの労働価値論に改変の手を加える必要があると主張しているが、説得力は極めて弱く、彼はマルクスの価値法則論を殺している。

マルクスの労働価値論が形成されたからこそ、資本主義の経済構造の分析が生まれ出たのである。そして、価値形態論が労働価値説を発展せしめた要因である。

だが、マルクス体系内部で価値形態論がどのような役割を果たしているかという点は未だ充分明らかになっていない。ミークの見解が現われるのも、価値形態論の役割の理解の不充分さのためでないかとぼくは思っている。

(二) マルクスは資本論の体系、経済分析の体系、経済動態の研究のために基礎理論を準備している。それが価値形態論である。ミーク、あるいはロビンソンの欠陥・無理解は価値形態論の役割を考察する努力を怠ったためではないか<sup>4)</sup>

9月、本学創立35周年・大学昇格10周年記念事業の一つとして進められていた新図書館が本館の東側に総工費2,300万円をかけて完成した<sup>5)</sup>

11月14日午前10時半より講堂において新図書館の落成式と正門の設置が挙行されている<sup>6)</sup>

4) 入江奨「価値形態論の経済学における役割－経済学における論証について－」『松山商大論集』第10巻第2号、1959年7月。

5) 『松山商大新聞』第94号、1959年11月14日。

6) 同上。

12月、入江先生は『松山商大論集』第10巻第3号に「資本理論における貨幣的要因の役割－アダムスミスの場合－」を発表した。この論文の概要は入江先生が後に次の如く記している。

「スミスの国富論の本筋である資本蓄積論は、労働体系的理論＝自然的真実価格体系の理論を基軸として展開されている。そのために貨幣的要因の役割が不鮮明になっている。この点にメスをいれるために、スミスの理論が貨幣中立的理論ではないという認識をかため、『流動資本』に含められた貨幣が専ら『貨幣としての貨幣』であるという見解、貨幣的要因が独自には無く、資本蓄積の進行の歩みのなかにおいてではあるが、資本蓄積、国民経済の発展に積極的な役割を果たすと見られているという解釈が示されている。国富の状況＝有効需要の状況という論理がスミス理論の根底によこたわっているという指摘もなされている」<sup>7)</sup>

1960（昭和35）年2月、入江先生を囲み、入江ゼミの卒業コンパを大街道泰平楽で開き、そこで、同窓会の話がもちあがり、4年生の篠崎正男が「春がくれば芽をだす、つくしんぼにちなんでつくし会」なんてどうかと提案して、「つくし会」と決まっている<sup>8)</sup>

3月11日、1960年度の入試が行なわれ、募集人員は250名（経済学科、経営学科各約125名）、志願者は1,245名で史上最高であった。合格発表は3月18日になされた<sup>9)</sup>

3月21日、松山商大第9回卒業式が行なわれ、商経学部254名が卒業した<sup>10)</sup>

---

7) 入江奨「松山商科大学大学院設置認可申請書」の研究概要。1971年11月10日。

8) 篠崎正男「つくし誕生について」『つくし』第29号、2006年1月。

9) 『松山商大新聞』第96号、1960年4月30日。1960年度『松山商科大学商経学部入学案内』より。

10) 『松山商大新聞』第96号、1960年4月30日。『松山商科大学（経済学部、経営学部）設置認可申請書類』（1961年9月7日）では299名（その後の再試等のためだろう）。なお、温山会名簿では300名（1959年10月卒業を含む）。



入江ゼミでは、青野寛、大谷泰之、岡利樹、篠崎正男、遠木武、中村弘、萬井将臣、三島茂、森原武彦、得居郁生ら16名が卒業した。

#### 10) 1960 (昭和35) 年度

入江先生、赴任10年目、36歳～37歳にかけての時期である。商経学部助教授で、短大も兼務している。

学長は星野通が続けている（4年目）。

本年は岸内閣の安保条約改正に反対する国民的運動が高揚する年である。学生運動も高揚する。

4月11日、午前10時より本学講堂において第10回入学式が挙行され、408名（経済学科309名、経営学科99名）が入学した。

星野学長は式辞において、本校は学識深く教養高き人材を養成し、経済文化の発展に寄与することを使命としている。その使命を達成するため、校訓三実主義を身につけてもらいたい。そして、諸君は学生であることを自覚して、政治活動、学生運動などはつつしんでもらいたい、などと述べた<sup>1)</sup>

学長が式辞で政治活動、学生運動を慎むよう訓示するなど、少し異常である。その背景に安保条約反対の国民的運動があり、それに本学学生達も参加していたことがある。だが、学長の制止にもかかわらず、当時の学生たちは運動に参加したようだ。

本年度の入江先生の授業科目は前年と同様で、一般教養科目の経済学、専門科目の経済学史、ゼミ1、2、そして短大の経済学であった。経済学史の授業では、白杉庄一郎『経済学史概説』（ミネルヴァ書房）を使用していたようだ。

本年のゼミ1には、片山敏治、金森学、篠原資昌、宮崎治樹らが入った。

また、入江先生は太田先生が部長の経済研究部（この年から経済学研究部から経済研究部に変更した－岩田先生より聞き取り）に関与していた。また、資

---

1) 『松山商大新聞』第96号、1960年4月30日。

本論研究会も指導していた（岩田氏によると、一時資本論研究会は中断していたが、再開したという）。さらに新聞学会の顧問を続けていた。

このとき、入江先生から資本論を学んだ1人に岩田裕（当時3回生、太田ゼミ）がいる。岩田裕の回想（2004年）を紹介しよう。

「（この年次の）思い出は、『資本論研究会（読書会）』を入江先生をチューターとして始めたことである。はじめたのは確か安保闘争が始まった頃のことと記憶するが、大学の空教室を利用して四・三・二回生十名位の人数で週一回の開催であった。太田ゼミに若干失望していた私にとって、この読書会は経済研究部と並ぶ、参加していて大変な充実感を覚える機会であり、毎回楽しくて仕方なかった。『資本論』（邦訳）の学習はさすがに難解で解説書と首っ引きで読む始末だった。英語の原書、独語の原書を何冊か読破し、ケインズの『一般理論』（邦訳）も二回生次に読んでいた小生にとって『資本論』の原書を読むのはちょっとためらった。入江先生は、学生が解釈に難渋しているところを、的確に解説していただき、毎回二十～三十ページのスピードで進行し、三回生次の終りには第一巻をかなり読んだと記憶している」<sup>2)</sup>

また、岩田氏の別の回想（2002年）も引用しておこう。

「大学入学後…兎に角勉強したいという思いが強力で、片っ端から小説や専門書を読み耽りました。自宅通学の好条件のもと私の人生で最も読書に集中し、同時に友人と議論できた時期でした。その当時に読んだ本は沢山ありますが、なかでも私の将来を決定づけたのは、月並ですが、河上肇の『貧乏物語』、エンゲルスの『空想から科学へ』、マルクスの『資本論』

---

2) 岩田裕「入江先生と私の青春時代」『つくし』第28号、2004年10月。

でした。『資本論』については、入江奨先生という方が指導されていた研究会に参加して、友人と励ましあいながら、第一巻を読了し、大学院に進んでからも大変役立ちました<sup>3)</sup>

5月19日、岸内閣と自民党は衆議院に警官隊を導入し、新安保条約を成立させるため会期50日延長を強行採決した。

5月20日、午後5時より県庁前で安保阻止県民会議主催の抗議集会在開かれ、本学からも40余名が参加した。後、デモに移った。デモ参加は本学では空前であった<sup>4)</sup>

そして、この日の夜、愛媛大学・松山商科大学の教授グループである大学人が中心になって「愛媛安保批判の会」結成準備会をつくった。委員長は愛媛大学の小林登であった<sup>5)</sup>。この時の松山商大の教員はおそらく、伊藤恒夫、入江奨、望月清人らであったと思われる。

5月25日、午後2時半より松山商大の弁論部主催・新聞学会後援の「新安保条約研究集会」が講堂にて開催された。約300名が参加し、盛況であった。講師は伊藤恒夫「安保改定と民主政治」、入江奨「安保改定の経済的背景」であった。午後5時からは国鉄前で松山地区の青年学生共闘会議主催の抗議集会在開かれ、本学の学生70名が参加し、注目を浴びた<sup>6)</sup>

このとき3年生であった岩田裕もデモに参加している。その回想(2004年)によると「この年次の思い出はなんといっても安保反対闘争であろう。『安保条約の国会強行採決が議会制民主主義を破壊する』ものでけしからんというのが、反対の街頭デモに参加した当時の私達の一致した見解であった。デモ参加を呼びかけたのは、同じゼミ生の○君だったと思うが、ゼミ生のほぼ三分の一

---

3) 「岩田裕先生に聴く」岩田裕教授退官記念号『高知論叢 社会科学』第73号、2002年3月より。

4) 『松山商大新聞』第98・99号、1960年5月30日。

5) 島津豊幸編『愛媛県の百年』山川出版社、1988年、321頁。

6) 『松山商大新聞』第98・99号、1960年5月30日。

が参加したと記憶している。太田先生とはこの問題で激論となり、先生いわく『君たちは一部のひとに利用されている。街頭デモはよしなさい』とまで言われたが、そんなことで血気盛んな若者たちを説得できるわけはなかった。街頭デモに参加して、感激した。そこには、松山商大の先生方や愛媛大学の先生方の顔があったが、なんと伊藤恒夫先生（元商大教授学長、故人）、入江先生の姿を発見したことである。両先生への尊敬感は相当に高まったと思う<sup>7)</sup>と述べている。

そして、この安保闘争が岩田裕の人生を決定づけたという。岩田は「将来は研究者になりたいと考える決定的出来事の一つが、3年生の時に勃発した『安保闘争』でした。地方の都市（当時の松山市は人口約30万人）でも、集会やデモ行進が行われ、私も友人に誘われて何度か参加しました。私の尊敬する伊藤恒夫先生（故人）、入江先生、望月先生も集会やデモ行進に参加されており、大きな刺激を受けました。日本の進路について真剣に考えなければならないという意識が高揚すると同時に自らの人生の方向を決定づける出来事でした」と述べている<sup>8)</sup>。

6月5日、午後1時より「愛媛安保批判の会」結成準備会は松山商工会館ホールにて正式の発会式を挙行了。参加者は約200名。松山商大教授伊藤恒夫と愛大助教授篠崎勝の記念講演の後、伊藤恒夫（松山商大）、黒田幸弘（愛媛大学）、坂本忠士（劇作家）、伊達泰介（青年経済同友会）らを常任世話人とし、事務所を木原鉄之助弁護士事務所におき、幅広く県内知識人・文化人を結集した安保反対の運動を始めた<sup>9)</sup>。

以上のように、岸内閣の新安保条約に対しては、本学の伊藤恒夫、入江奨、望月清人らの各先生らも激しい憤りを持ち、運動に参加していたことがわかる。

7) 岩田裕「入江先生と私の青春時代」『つくし』第28号。

8) 「岩田裕先生に聴く」岩田裕教授退官記念号『高知論叢 社会科学』第73号、2002年3月より。

9) 島津豊幸編『愛媛県の百年』山川出版社、1988年、321頁。

6月、本学は伊予三島・川之江の経済・社会実態調査を始めた。この調査は前年12月愛媛新聞社からの依頼を受けて、本学が4月調査団を結成して始めた。調査団は、名誉団長が星野通、団長が太田明二、産業経済班が入江、望月、稲生、社会文化班が伊藤、八木、井出、産業構造班が太田、増岡、山下、製紙経営班が川崎、菊池、元木、井上、神森の各氏であった。そして、12月1日～3日も現地に行き本調査した<sup>10)</sup>このように入江先生も産業経済班に参加していた。

7月、入江先生は、『松山商大論集』第11巻第2号に、豊倉三子雄著の『古典派恐慌論－マルサスとリカードウの論争史－』（弘文堂、1959年6月）を書評している。

この書評の概要について、入江先生は後に次のように記している。

「恐慌論に関するリカードウの論理不変説、マルサスの論理変更説という認識を伴った本質的には二つの一般的供給過剰論の対抗的な生成発展の過程における論争としての両者の恐慌論論争の認識、マルサス理論の停滞性・反動性、リカードウ理論の前進性・進歩性の認識を提起した豊倉説を高く評価すると共に、氏の説が『通説』への付加分として出され、代替物として出されていないことに問題をみとめ、両者の全理論体系にかかわる問題として更に検討する必要があるという評価をおこなったもの」<sup>11)</sup>

12月15日、12月末で星野学長の任期が満了するので、学長選考規程により次期学長を決めるための学長選挙が行なわれた。学長候補者推薦委員会は星野通教授1名を推薦し、助手以上の教職員、課長以上の事務員、各課から1名の代表者で投票がなされ、3分の2以上の得票により再任された<sup>12)</sup>

10) 『松山商大新聞』第109号、1962年4月30日。

11) 入江奨「松山商科大学大学院設置認可申請書」の研究概要。1971年11月10日。

12) 『松山商大新聞』第101号、1960年12月19日。

1961（昭和36）年1月、入江先生は『松山商大論集』第11巻第4号に「賃金と労働力の価値」を発表した。そこで、入江先生は、総評調査部の小島健司氏は賃金は労働力の価値で決まり、企業の支払い能力で決まるものではない、といい、現実の賃金は労働力の価値以下の低賃金となっており、その原因は相対的過剰人口の圧力であるとして、全国一律最賃制を要求している。また、永野順造氏も小島氏と同じく賃金は労働力の価値を基礎としながら労資間の力関係で決まる、価値どおり賃金の実現しても労働者は搾取されており、資本主義は崩壊しない、賃金闘争は社会主義の階級闘争と異なる、と述べている。僕も小島氏や永野氏の見解に賛成であるが、この筋道だけでは説得力が弱く、弱点がある。それは賃金は労働力の価値で決まると言いながら、労資の力関係、需要供給説的に説明していると、そのように説明される限り、賃金の決定要因は需要要因と供給要因に分解され、労働力の需要関数は支払い能力あるいは収益性以外のなにものでもないことになると、その問題点を指摘している<sup>13)</sup>

3月10日、1961（昭和36）年度の入試が行なわれ、募集人員250名に対し、志願者は1,271名で昨年度（1,245名）を少し上回り、史上最高となった。3月16日、358名（経済学科291名、経営学科67名）の合格者をだした<sup>14)</sup>

3月20日、第10回卒業式が行なわれ、商経学部261名が卒業した<sup>15)</sup> 入江ゼミでは伊田修、小原正明、新野清（経済研究部）、中村勝良、藤川哲夫、藤木和義、宮下英範、森俊雄、千葉凱三ら21名が卒業した。

## 11) 1961（昭和36）年度

入江先生赴任11年目である。入江先生は4月1日教授に昇格した。この時、37歳であった。

13) 入江奨「賃金と労働力の価値」『松山商大論集』第11巻第4号、1961年1月。

14) 『松山商大新聞』特別号、1961年3月20日。

15) 同上。『松山商科大学（経済学部、経営学部）設置認可申請書類』（1961年9月7日）では306名（その後の再試等のため）。『六十年史（資料編）』も306名。『温山会名簿』では307名（1960年10月卒業を含む）。

学長は星野通が続けている（5年目）。

4月10日午前10時より本学講堂にて入学式が行なわれ、406名（うち女性6名）が入学した<sup>1)</sup>。この時の入学生の一人に山口卓志（1961年4月入学、1963年4月入江ゼミ、1965年3月卒業）がいる。

山口卓志は、入江先生と同じ広島県の出身で、米軍の福山空襲により片足を失っていた。そこで、入江先生と山口さんのお父さんが連れ立って、入江先生の短大での指導生であった北哲朗宅（清水町に住宅を構えていた）を訪れ、「この子は福山空襲で、片足を失っているのだから、通学の便利な貴君の家で預かってくれないか」と申し出た。北哲朗は丁度清水町に新築して2階に空き部屋があったので、こころよく引き受けた。以後、4年間、北は山口卓志を家族同様、息子のように慈しんだという<sup>2)</sup>。入江先生ならびに北哲朗の人間味溢れるエピソードである。

本年度、星野学長・理事長は来年度2学部開設を見越して、川中建雄（商品学）、林薫雄（貿易経営、実用英語）、上野雅和（民法、物権）、高沢貞三（生産管理）、J・D マンクマン（英会話）らを採用している<sup>3)</sup>。

本年度の入江先生の授業担当科目は前年と同様で、一般教養科目の経済学、専門科目の経済学史、ゼミ1、2、そして短大の経済学であった。

本年のゼミ1には、土井暹、中川富士男、林陸弘（資本論研究会）、三村俊治、西原闕らが入った。

また、入江先生は経済研究部（部長は太田明二）に関与している。また、資本論研究会を指導し、さらに、新聞学会の顧問も続けている。さらにまた、この年から軟式庭球部（ソフトテニス）の部長につかれた（以後、退職直前の1992年度まで続けた。以下、軟式庭球部部长は略す）。

---

1) 『松山商大新聞』第103号、1961年4月28日。なお『六十年史（資料編）』173頁では404名。

2) 北哲朗「入江奨先生の松山大名誉教授就任をお祝いして」『つくし』第20号、14頁、1995年7月。

3) 『松山商大新聞』第103号、1961年4月28日。

7月、2学部設置委員会で経済学部、経営学部の設置計画が進められている。委員長は増岡喜義で、副委員長は元木淳、委員は大鳥居蕃、太田明二、八木亀太郎、伊藤恒夫、菊池金二郎、木村真一郎であった<sup>4)</sup>。入江先生は未だ若手のためだろう、入っていない。

9月、夏休みに入るとともに始められた木造の2号館、4号館、学生ホールの移転工事が完了した。学生ホールは加藤会館の西側に、2号館は旧学生ホール跡に、4号館は体育教官室前に移された<sup>5)</sup>。

9月7日、星野通理事長は文部省に対し、現在の経済学科と経営学科を経済学部と経営学部に昇格させる『松山商科大学（経済学部、経営学部）設置認可申請書』を提出した。定員は、経済学部経済学科1学年150名、総定員600名、経営学部経営学科1学年150名、総定員600名、1962年4月1日開設であった<sup>6)</sup>。入江先生は経済学部経済学科の専門科目、経済学史、一般教育科目の経済学の担当であった。

1962（昭和37）年1月20日、文部省から通知があり、経済学部、経営学部の新設が認可された。

1月、入江先生は『松山商大論集』第12巻第4号に「リカードウの価値論に関する覚書－『原論』第7章を中心として－」を執筆した。この論文の概要について、後に入江先生は次のように記している。

「『一国における諸商品の相対価値を左右すると同一の規則は、二つの或いはそれ以上の国々の間に交換される諸商品の相対価値を左右しない』という命題が、リカードウの全理論体系－価値論体系の中で如何なる地位を

4) 『松山商大新聞』第105号、1961年7月8日。

5) 『松山商大新聞』第106号、1961年9月14日。

6) 『松山商科大学（経済学部、経営学部）設置認可申請書』より（以下、『設置認可申請書』と略す）。この申請書の内容については、拙著『評伝 法学博士星野通先生－ある進歩的民法・民法典研究者の学者人生』（日本評論社、2019年）の中で、詳細に述べているので、参照されたい。



占めているか、それはリカードの価値原理を台なしにするものかどうかという点に関心を持ち、外国貿易の分析にもしみとおっている全理論体系の核心は何かという観点からその価値論を再検討し、その核心が外国貿易の領域にどのようにしみとおっているかを再検討する必要があるとの見地に立っておこなわれた研究。その命題が、その価値論体系を新しい問題領域に適用する糸口をつくり、その価値論体系を強化しているという見解、相反関係論の浸透がその命題のこのような役割を具体的に推進しているという見解、『原理』第七章がその価値論にとって不可欠な部分であり、その価値論体系は第七章をまっではじめて完結し、投下労働原理・相反関係論がその体系の中軸・根幹であるという見解、その価値論の全体系が生産力的性格のものであり非社会的論理構造をもつという見解が、提起されている」<sup>7)</sup>

2月20日、今年4月発足予定の経済、経営学部の学部長選挙を行なわれ、その結果、経済学部長に大島居蕃教授（60歳）、経営学部長に菊池金二郎教授（56歳）が選出されている。

3月8日、1962年度の入試が行なわれ、募集人員は経済学部200名、経営学部200名（定員は各150名だが多く募集）に対し、志願者は経済学部1,429名、経営学部1,232名であった<sup>8)</sup>

3月20日、本学第11回卒業式が本学講堂にて挙行され、商経学部248名が卒業した<sup>9)</sup>。この年に岩田裕（太田ゼミ、経済研究部）も卒業した。なお、岩田裕は神戸大学大学院に進学する。入江ゼミでは片山敏治、金森学、篠原資昌、宮崎治樹ら19名が卒業した。

7) 入江奨「松山商科大学大学院設置認可申請書」の研究概要。1971年11月10日。

8) 『松山商大新聞』特別号、1962年3月20日。

9) 同上。なお、『六十年史（資料編）』では28名。『温山会名簿』も281名（1961年10月卒業を含むため）。

3月、本学の教員が一昨年より調査研究していた、伊予三島・川之江地域の経済・社会実態調査の報告書『伊予三島・川之江 地域社会の近代化－経済・社会の実態調査報告－』が経済研究所より刊行された。入江先生も、第三章伊予三島・川之江製紙業就業者の実態を稲生晴，越智俊夫，望月清人とともに執筆している<sup>10)</sup>

## 12) 1962 (昭和 37) 年度

本年度、経済学部・経営学部の2学部体制発足の年である。以下、入学、卒業等については経済学部についてのみ記し、経営学部については省略する。

入江先生赴任12年目である。38歳から39歳にかけての時期である。入江先生は経済学部経済学科の教授となり、また、短大の教授を兼務した。

学長は星野通が続けている（6年目）。初代経済学部長には大鳥居蕃が就任した。

4月10日、入学式が行なわれ、経済学部252名が入学した<sup>1)</sup>

星野学長は式辞において、松山商大の歴史、校訓「三実主義」の精神を述べ、諸君は学びつつある身だから、社会改革に情熱をむけるよりも自己の完成、学問研究を第一とせよ、集団的な学生運動はやめてほしい、などと訓示した<sup>2)</sup>

本年度、経済学部発足に伴い新しい教員として、高橋久弥（経済政策概論）を講師として、藤田貞一郎（日本経済史）を助手として採用した<sup>3)</sup>

本年度の入江先生の授業科目は、前年と同様、一般教育科目の経済学、専門科目の経済学史、ゼミ1，2，そして短大の経済学であった。

---

10) 松山商科大学伊予三島・川之江地域社会経済調査団著『伊予三島・川之江地域社会の近代化－経済・社会の実態調査報告－』松山商科大学経済研究所発行，1962年3月、『松山商大新聞』第109号，1962年4月30日。

1) 『六十年史（史料編）』173頁。

2) 『松山商大新聞』第109号，1962年4月30日。

3) 同上。

本年のゼミ1には、上本俊治、山根康宏、若松清人、鷲野共次郎らが入った。ゼミ1は、前期に「経済学教科書」の資本主義の分析の部分の輪読、後期に産業循環について各人に発表させている<sup>4)</sup>。ゼミ2（林陸弘らの学年）のテキストは未確認である。

入江先生は引き続き、資本論研究会を指導していた。『松山商大新聞』第119号（1962年4月30日）に1962年度のサークル紹介があり、資本論研究会も紹介されている。それによると、「2年以上の部員数7名、新入生募集人員20名、部長入江奨、主将林陸弘。資本論読書会を毎週月曜日入江先生宅で開催」となっている<sup>5)</sup>。

また、新聞学会顧問を続けていた。さらにまた、本年度、入江先生は教職員会委員を務めている。

さて、2学部体制に伴い、4月「松山商科大学合同教授会規則」が定められた。経済学部教授会規則は、遅れて1963年1月に制定され、第1教授会と第2教授会に分けられ、第1教授会は専任の教授、助教授および講師をもって構成され、第2教授会は専任の教授をもって構成され、それぞれに付議事項が定められた<sup>6)</sup>。

4月、星野学長は新入生向けの『学生便覧』に校訓「三実主義」（真実・忠実・実用）を掲げ、加藤彰廉が創唱し、田中忠夫によりその意義が確認強調された「三実主義」について、簡明な定義・説明を行なっている<sup>7)</sup>。

5月、入江先生は、経済学史の講義のためのテキストとして『経済学史講義第一巻』を松山商大生活協同組合から出版した。はじめての教科書である。未見であるが、その内容について、入江先生は後に次のように記している。「重商主義からリカードウまでを扱う。とくにバァボン、ノース、ケネー、スチュ

---

4) 『松山商大新聞』第114号、1962年11月9日。

5) 『松山商大新聞』第109号、1962年4月30日。

6) 『五十年史』318～320頁。

7) 1962（昭和37）年度の『学生便覧』。

アート、スミス、リカドウについて、独自の見解を出すことに努めている。更にホップス、ベティ、スミス、リカドウへと続く労働価値論史に配慮している。全体として重商主義段階をも含めて再生産論の形成展開過程として、学史をおさえてみたらどうなるかという視点をつらぬいている（三十五万余字）<sup>8)</sup>

5月12日、学園拡充第2期計画の3号館が完成した（本館の西側）。

5月26日、大学祭の学内講演会（松山商科大学新聞学会主催）で入江先生が「日本経済とEEC問題」と題して講演した。そこで、入江先生は、EEC（European Economic Community = 欧州経済共同体）成立の歴史と世界経済に重要な役割を果たしていることを述べ、日本経済との関係について、国際競争力の強くなかったEEC製品がアジア市場に進出し、日本の市場を奪う懸念があり、また日本に安く輸入されるようになるだろうと述べている<sup>9)</sup>

5月31日から6月3日まで、第8回西日本学生経済研究大会が福岡大学で開かれ、23大学、2,000人が参加した。松山商大からは統一テーマ「日本経済の構造とその将来」に経済研究部が発表し、また、理論経済学部門、計量経済学部門、経済学史部門、日本経済部門、商学一般部門で、いずれも経済研究部メンバーが報告するなど、その活動ぶりは目をみはるものがあった<sup>10)</sup>

本年度の特筆すべきこととして、6月21日、ゼミナール連合協議会（略称ゼミ連）が発足したことである。その間の事情、経緯について、『松山商大新聞』は次のように記している。

「過去数回、実現を見ずに終り、昨年度始めにも発足寸前にまでいき（本紙一〇三号参照）やはりだめだったゼミナール連合協議会は今年度清水、大村ゼミ連発起人らの尽力により下準備が進められた。そして五月十四日

8) 入江奨「松山商科大学大学院設置認可申請書」の研究概要。1971年11月10日。

9) 『松山商大新聞』第110号、1962年5月22日、同第111号、1962年6月11日。

10) 『松山商大新聞』第111号、1962年6月11日。同第112号、1962年7月6日。

の学生総会に同好会に承認されて正式に発足の運びとなり、ついに念願が果せられたわけである。

同協議会会則の原案をもとに六月二十一日各ゼミの代表委員会を開き、原案修正の検討や今年の行事予定を決定した。

- 一、全日本学生経済ゼミナール大会への参加
- 一、連合誌発行
- 一、学内ゼミナール発表会
- 一、親睦をはかるための諸活動、ピクニック、ゼミ対抗野球等<sup>11)</sup>

ゼミ連の会長は直接ゼミを担当していない教授、ということで経営学部の井出正助教授（教育学）が選ばれている。

ゼミ連の行事中、全日本学生経済ゼミナール大会（インゼミ）への参加はこれまで、経済研究部、経営研究部が中心となり参加していたが、ゼミ連発足によりその世話で各ゼミが出席参加するようになった<sup>12)</sup>また、ゼミ連が学内ゼミナール大会を主催するようになった（第1回は1964年12月）。なお、西日本ゼミや中四ゼミへの参加は、従来どおり、経済研究部や経営研究部が中心となり、参加している。

10月、来年度は創立40周年にあたるので、星野学長・理事長は創立40周年記念事業準備委員会を発足させた。委員長は増岡喜義が就任した。入江先生は記念論文集編集委員、記念学会委員、地域社会研究室設置調査委員、教職員学生福祉施設委員に選ばれている<sup>13)</sup>

11月上旬には第2回中四ゼミ、下旬には第9回全日ゼミ（インゼミ）が富山大にて開催されたが、『松山商大新聞』に記事はなく、具体的には不明である。

---

11) 『松山商大新聞』第112号、1962年7月6日。

12) 同上。

13) 『松山商大新聞』第120号、1963年6月29日。

1963（昭和38）年3月8日、1963年度の入試が行なわれ、募集人員は経済学部200名（定員は各150名）に対し、志願者は1,429名であった<sup>14)</sup>

3月20日、本学講堂において商経学部第12回の卒業式が行なわれ、商経学部272名が卒業した<sup>15)</sup> 入江ゼミでは土井暹、中川富士男、林陸弘（資本論研究会）、三村俊治、西原闖ら11名が卒業した。

### 13) 1963（昭和38）年度

入江先生赴任13年目である。39歳から40歳にかけての時期である。

学長は星野通が続けている（7年目）。経済学部長は大鳥居蕃が引き続き務めた。

4月10日、入学式が本学講堂にて行なわれ、経済学部335名が入学した<sup>1)</sup> この時に入学した1人に一柿卓爾（1963年4月入学、1965年4月入江ゼミ、1967年3月卒業）がいる。

星野学長は式辞で、松山商大の歴史、建学の使命、三実主義の精神を述べ、憲法で思想・表現の自由、団体行動の自由が保障されているが、学生の本分は学問研究にあり、政治活動に狂奔しないよう自重を促した<sup>2)</sup>

本年度も経済学部の新教員として、小原一雄（中国語）、松野五郎（統計学）、渡部孝（英語）、越智武（体育）らが採用された<sup>3)</sup>

本年度の入江先生の授業科目は、前年と同様で、一般教育科目の経済学、専門科目の経済学史、ゼミ1、2、そして短大の経済学であった。

本年度から各授業科目の「教授要目」が判明する。

一般教育科目の経済学の教授要目の大要は次の通りで、教科書は入江先生の

---

14) 『松山商大新聞』第117号、1963年3月20日。

15) 同上。『六十年史（資料編）』では328名、『温山会名簿』では330名（1962年10月卒業を含む）。

1) 『六十年史（史料編）』173頁。

2) 『松山商大新聞』第118号、1963年5月13日。

3) 同上。

講義案（プリント）を使用している。

- 「第1編，総論，経済現象についての輪郭を体系的に示し，問題を究明する方法，過程の道標をえる。
- 第2編，経済現象を学問的にとらえる基礎として価格体系に注目し，商品生産社会の基本的経済法則を示す。
- 第3編，現在の生活の基礎がどうなっているかを，経済生活の物質的条件である生産力発展に中軸をおいて究明する。
- 第4編，経済生活が価格体系と生産力体系の統一されたものとして展開されていることを究明し，その統一がどのような内部構造をもちながらおこなわれているかを明らかにする。
- 第5編，経済生活の内部構造の個々の部門が，全体とどのように結びついているのかをあきらかにする。
- 第6編，国際的な問題の解明。
- 第7編，現代の様々な諸問題について法則的につかみ，我々の生活を覆っている諸矛盾解決の基礎を得るためのおおよその検討をつける」<sup>4)</sup>

専門教育科目の経済学史の教授要目の大要は次の通りで，教科書は入江先生の講義案（プリント）を使用している。

- 「第1編 第1章 重商主義以前（1600年以前）  
第2章 重商主義（17世紀）  
第3章 重商主義の解体（17～18世紀）  
第4章 重農学派（18世紀中葉）

---

4) 1963年度の『教授要目』より。『教授要目』がわかるのは1963年度以降である。

- 第5章 貨幣体系的經濟論理の形成（18世紀中葉）
- 第2編 第1章 古典学派の形成（18世紀中葉）
- 第2章 古典学派の發展期（19世紀初葉）
- 第3章 資本制生産の發展過程の内在的矛盾に関する論理の萌芽（19世紀初葉）
- 第3編 第1章 古典学派の動揺（19世紀中葉）
- 第2章 古典学派批判の生成－その(1)社会主義の道への生成
- 第3章 同 －その(2)国民主義的，歴史主義的經濟論理の生成
- 第4編 第1章 歴史的，変革的，經濟論理の形成（19世紀中葉～末葉）
- 第2章 近代主義的，超階級的，均衡論的，經濟論理の形成（19世紀中葉～末葉）
- 第3章 歴史主義的，社会政策的，制度的，經濟論理の形成（19世紀末葉）
- 第4章 ケンブリッジ学派（19世紀末葉）
- 第5章 オーストリア学派（19世紀末葉）
- 第6章 ローザンヌ学派（19世紀末葉）
- 第5編 帝国主義段階における經濟学の動揺と転化－その略説<sup>5)</sup>

このように，入江先生の經濟学史の講義は重商主義以前から現代經濟学に至る極めて壮大，体系的なものであったとみられる。

本年のゼミ1には，九門一明（經濟研究部，学友会副委員長），古賀英喜（經濟研究部，資本論研究会主将），寺岡徹（經濟研究部，ゼミ連），中浜利生，山口卓志（新聞学会編集長）らが入った。この学年はとくに活発な学年であった。

---

5) 同。



ゼミ1のテキストはレーニンの『帝国主義論』であった<sup>6)</sup>そして、ゼミ活動として、11月の中四ゼミに参加し、発表している。

また、入江先生は経済研究部（部長は太田明二）に関与し、また資本論研究会を自宅（校宅）で指導している。資本論研究会は『松山商大新聞』の1963年度サークル紹介に次のように述べられている。

「昨年度の活動報告書。一、いわゆる資本論の比較的平易な部分から読んでいこうということで、第二分冊の資本主義の生成、発展にあたる部分を例証を中心に読んでいった。二、読書会としては実にアカデミックで和気あいあいとした雰囲気を読んでいくことができた。二年生以上の部員数十一名、新入生募集人員三名、部長名入江奨、主将古賀英喜。

今年度の活動方針。一、今年は一般に資本論で、難解とされる第一分冊から読んでいき、資本論の中核にいどみ、現代資本主義の諸現象を解明したい。日時、毎週水曜午後六時より入江先生宅<sup>7)</sup>

また、新聞学会の顧問を続け、教職員会委員も引き続き務められている。

6月14日から16日までの4日間、第9回西日本学生経済研究大会が長崎大学にて開催され、本学は経済研究部が18部門中7部門（経済原論A部門〔テーマ、経済成長下における技術進歩、資本蓄積、所得分配をめぐる諸問題〕、経済原論B部門〔テーマ、日本独占資本の体質－戦前戦後の比較を通して－〕、日本経済部門〔テーマ、設備投資と経済成長〕、経営経済部門〔テーマ、産業経営に於ける人づくりの問題〕、労務管理部門〔テーマ、中小企業の労務管理〕、ジュニア部門〔テーマ、近代経済における分析方法－所得分析と価格分析－〕）に参加し、報告を行なっている<sup>8)</sup> 本年も経済研究部の活発な活動が窺われる。

6) 入江奨「山口卓志君の学部学生時代」『松山商大論集』第39巻第2号、1988年6月。

7) 『松山商大新聞』第118号、1963年5月13日。

8) 『松山商大新聞』第120号、1963年7月10日。

11月、創立40周年記念論文集が刊行された。入江先生も、「ジェボンズと労働体系－労働価値論史覚書－」を執筆した。この論文は、古典派の労働価値論と完全に訣別し、限界効用理論の創設者であるジェボンズの経済学の特徴を彼の『経済学原理』に内在して検討している。この論文の概要について、入江先生は後に次の如く記している。

「効用理論体系としてのジェボンズの経済学体系に余りにも多くの労働者が含まれていることを意識し、労働価値論拒否の経緯を労働価値論史に含め、「労働価値論」の古典派からマルクスへの質的发展の経緯を更に掘り下げ、拒否＝否定の経緯の中で注目された諸点が肯定的否定の経緯のなかでどのように扱われているかを検討する必要があるという観点に立ち、労働価値論が拒否されたときにどのような再生産論が展開されることになるかという問題を展望しつつ行われた研究。リカアドウ理論のアキレス踵の一つである異質労働問題の処理の仕方に向けられたジェボンズのリカアドウ批判、支出労働を失われたものと見るジェボンズの見解、貨幣捨象問題をめぐる古典派とジェボンズの相似性が注目されている」<sup>9)</sup>

11月9日、創立40周年記念式典が午前10時より本学講堂にて行なわれた。星野学長は式辞において、松山商大の歴史、加藤彰廉校長、田中忠夫校長、伊藤秀夫校長・学長らの功績を讃え、1962年には経済、経営の2学部体制となり、関西私立大学の雄となった学園の道程を述べ、今後、研究、教育を推進し、日本文化の発展に貢献せんとする抱負を述べた<sup>10)</sup>

式典のあと、永年勤続の教職員が表象され、入江先生も表彰された<sup>11)</sup>

そのあと、温山会から学校に対し、三恩人の銅像贈呈式が行なわれ、新田長

9) 入江奨「松山商科大学大学院設置認可申請書」の研究概要。1971年11月10日。

10) 星野学長の式辞は『六十年史（資料編）』302～304頁。『温山会報』第7号。

11) 『松山商大新聞』第122号、1963年11月5日、同第123号、1963年12月18日。

次郎翁は本館前に、加藤彰廉は図書館前に、加藤拓川は三号館前に置かれた。三恩人のプロフィールが星野通学長によって書かれた<sup>12)</sup>

11月10日、11日の両日、40周年記念事業の一環として、本学において第3回中四国政経ゼミが開かれた。経済研究部が主催し、11月10日は一般討論「世界経済のブロック化と我国の立場」、11日は部門別討論で理論経済学部門「経済成長と技術進歩」、日本経済A部門「低金利政策下における貿易為替自由化」、日本経済B部門「経済成長と物価変動」、経済学史部門「ケインズの経済思想」、マーケティング部門「流通の中に於ける広告の役割と効果」、経営管理部門「技術革新の進展下に於ける労務管理の諸問題」、民法部門「農村に於ける均分相続の是非」、憲法部門「基本的人権の侵害に対する憲法学的救済を論ずる」、商法部門「新産業秩序と独占禁止法」、政治部門「大衆国家（大衆デモクラシー、大衆政治）の現状について」、ジュニア部門（価値論の意義）、11部門が開設され、経済研究部から8チーム、入江ゼミから2チーム、太田、安井、高沢、越智、高村の各ゼミ、商品学研究会、社会科学研究会から各1チームが参加した。加盟校6大学（広大、広商大、香川大、高知大、愛大、本学）に加え関学、近大を加え、参加8大学であった。参加状況からみて、松山商大の比重は抜群であった<sup>13)</sup> 入江ゼミの2チームは経済学史部門とジュニア部門であろう。

11月下旬には、10回全日本学生経済ゼミナール大会（インゼミ）も開かれ、本学からも参加したと思われるが、その記事は『松山商大新聞』にはなく、不明である。

11月21日、第2次池田内閣下の第30回衆議院選挙が行なわれ、自民党は議席を少し減らしたものの、大勝した。この選挙に関し、22日の新聞に松山

---

12) 『松山商大新聞』第122号、1963年11月5日。同第123号、1963年12月18日。三恩人の星野通学長の紹介文は『松山商科大学六十年史（写真編）』115頁に全文が掲げられている。

13) 『松山商大新聞』第121号、1963年10月10日、同第122号、1963年11月5日、入江奨「学生の自主的研究活動の動向の一齣」『六十年史（写真編）』247～250頁。

商大生4名が公選法違反の疑いで任意出頭、取調べ中という記事が出て、本学は大騒ぎとなった。

星野学長はこの不祥事の責任を痛感し、任期終了を待たずに辞意を表明した。しかし、慰留されている。

星野通学長の任期が本年12月末で満了となるために、11月26日、次期学長候補者を選ぶための推薦委員会が開かれ、満場一致で増岡喜義教授を学長候補者に決めた。

12月10日、学長選挙が行なわれた。3分の2以上の信任により増岡喜義が次の学長に決定した<sup>14)</sup>

増岡喜義の経歴は次の通りである。

1903年12月松山市に生まれ、1923年4月、創立時の松山高商に入学し、1926年3月卒業し（第1期生）、九州帝大法文学部に進学し、1929年3月卒業。同年5月、本校に講師として採用され、1930年4月助教授、1931年6月教授となり、1949年4月松山商科大学教授となっていた。また、校務では庶務課長（1943年3月～1952年7月）、事務局長（1952年7月～1957年4月）を務め、1957年4月から学校法人理事を務めていた<sup>15)</sup> 増岡は卒業生学長の第1号となった。

1964（昭和39）年1月1日、増岡喜義が第3代松山商科大学学長兼学校法人松山商科大学理事長に就任した。同時に松山商科大学短期大学部学長も兼務した。このとき、60歳であった。

増岡喜義新学長は就任の辞において、学生に対し、新学長としての学園づくりの構想・施策を述べた。それは、学園のビジョン（入学してよかったと満足できる学園づくり）、理想への歩み（研究室、図書館の整備、優秀な教員の増強等によるアカデミックな学園づくり）、協力の方途（教授と学生、学生相互の意思疎通、懇談会づくり）、学生に要望する心構え（建学の精神である校訓

---

14) 『松山商大新聞』第122号、1963年12月18日。

15) 増岡喜義退職記念号、『六十年史（資料編）』125～130頁より。

三実主義の真髓を論じ、何事にも負けない勇気と闘志をもって生きてほしい)を論じ、最後に昨年の不祥事を反省し、禍を転じて福となすよう叡知と勇気をもって行ってほしいと、述べた<sup>16)</sup>

1月、入江先生は、経済学史学会西南部会において「労働価値論史から見たジェボンズの経済理論」を報告している。その報告は「労働価値論史の内容をより正確でより弁証法的なものにするねらいでこのテーマがとりあげられた。労働それ自体が相等しからざる価値をもつ故に労働の同等性の仮定に立脚するリカードウ説が事実と合わぬという彼の指摘をどう評価するかに視点を合わせた報告」であった<sup>17)</sup>

2月20日に、大鳥居蕃経済学部長の任期が3月末で満了するので、学部長選挙が行なわれた。その結果、新経済学部長に上田藤十郎教授(64歳、経済史概論、日本経済史)が選ばれている<sup>18)</sup>

3月10日に、1964年度の入試が行なわれ、募集人員は250名(文部省定員は各150名)に対し、志願者は1,435名であった。3月17日に323名の合格発表をした<sup>19)</sup>

3月21日午前10時より本学講堂にて商経学部第13回卒業式が挙行され、商経学部326名が卒業した<sup>20)</sup>入江ゼミでは上本俊治、山根康宏、若松清人、鷺野共次郎ら12名が卒業した。

---

16) 『松山商大新聞』第124号、1964年3月21日。

17) 入江奨「大学院経済学研究科申請書類」の研究概要。1971年11月10日。

18) 『松山商大新聞』第124号、1964年3月21日。

19) 同上。

20) 同上。『六十年史(資料編)』では380名、『温山会名簿』では383名。